History of HyugaNakashima

創業期から40年まで

From1969-2008

History of HyugaNakashima

創業期

昭和30～40年代、戦後の焼け野原から立ち上がり、高度経済成長期へと突入した日本。工業港の開港によって臨海工業地帯として整いつつある日向細島に、日向中島鉄工所は産声をあげた。

history 1945-1969

なんでもやってみらんとわからん

父親に代わって家族を養うために鉄工の世界に入った創業者・島原義海。時代は高度経済成長期へ。

13歳で一家の大黒柱に

株式会社日向中島鉄工所の創業者、島原義海が鉄工の世界に入ったのは、生活の必要に迫られてのことだった。終戦間際の昭和20年8月10日、義海の父親が亡くなった。しかし、悲しんでいる暇はない。義海には6人の妹がいる。これからは長男である自分が、妹たちを養わなくては……。13歳の夏だった。

「おじさんを頼るしかない！」。鹿児島の串木野で育った義海は、高校卒業と同時に宮崎県の延岡市で鉄工業を営む叔父・中島助市を頼って、ひとり故郷を後にした。延岡の中島鉄工所で、義海は鉄工のイロハ、仕事の何たるかを一からたたきこまれた。戦後の復興期を経て、時代は高度経済成長期へ。昭和39年には日向延岡地区が新産業都市に指定された。

叔父である中島助市の胸像と(延岡にて)

持ち前の行動力で新規顧客開拓

日向には新しい工場が続々と進出してきた。この頃、義海が目をつけたのが製糖業だ。細島臨海工業地帯に工場を建設する「共和製糖」の、機械設備の下請けを受注しようというのだ。

ところが、仲間からは猛反対された。

「バカなこつ言うな！あっこん下請けはもう他に決まっちょるが！！」

「やってみらんとわからんわ。オレひとりで行ってみるわ！」

義海は、鹿児島県喜界島と与論島での仕事の実績を手に、ひとり共和製糖に乗り込んだ。すると先方の課長が声をかけてきた。

「あんた、その訛りは鹿児島な？」

「はい、串木野出身です」

「オレは加治木じゃが！」

薩摩隼人同士すっかり話が盛りあがり、下請けとして仕事を受注することができたのである。これが、今に至る共和製糖(現在の第一糖業)との長いおつきあいの始まりとなった。共和製糖の細島進出と同時に日向出張所を設けた中島鉄工所は、同社の工場建設からメンテナンス業務まで任されることになる。ところが昭和41年、共和製糖の細島工場建設をめぐる不正融資疑惑が持ちあがる。いわゆる「黒い霧事件」。のちに共和製糖は、第一糖業として再出発する。

history 1967-1972

プレハブからの新会社出発

叔父の会社から独立。6人のメンバーから「日向中島鉄工所」は始まった。

「日向中島鉄工所」誕生

一方、中島鉄工所にも大きな事件が起きていた。社長の中島助市が、大分の現場の視察中、橋げたから落下して亡くなったのである。義海はこれを期に、独立を決意。しかし当初、会社との交渉はなかなかうまくいかず、しばらくは延岡組と日向組に分かれて仕事をするという状況だった。義海は亡くなった社長と血縁だけに、会社が分裂するような状況に胸を痛めた。しかし昭和44年、会社との話し合いがまとまり、晴れて正式に独立。新しい会社の名は、「日向中島鉄工所」。第二の父とも言える叔父の姓を冠した社名だった。

新会社は、第一糖業の敷地の一部を借りる形でスタートした。小さなプレハブの事務所ひとつ、義海を合わせ6人での出発だった。創業時の6人のメンバーのひとり、元営業技術部の黒木富男さんは、義海と初めて会ったときのことを鮮烈に覚えている。日向出身の黒木は、高校を卒業して延岡の中島鉄工所に入社した。2年目からは延岡にある会社の寮で生活していたが、日向出張所で働く義海とはまったく面識はなかった。ところがある日、日向出張所の人員が足りないから来てくれと応援を頼まれる。それも今日のうちに荷物をまとめて、日向に来てほしいという。

「朝、その話を聞いて、夜までには移るという慌しさでした。その日の夕方、日向の現場監督だった島原義海さんご自身が寮まで迎えに来てくれたんですよ。まさか監督自ら来られるとは思わないから驚きました。日向の私の実家まで送ってくれたんですが、その車中いろんな話をして、また自分から即動くというその姿勢を見て、ああこの人ならついていけると思ったものです」。

黒木は、義海がのちに独立創業したときに、まっさきについて行くことになる。義海の行動の早さは、こんな場面でも思い出されるという。

「創業から2年目、社員みんながまとまるようなアイデアはないかと聞かれました。私は野球をやっていたので、野球部を作ってみてはと提案しました。すると翌日には早速スポーツ店に出向き、バットやグローブなど道具一式を揃えてきたんです。自分は野球をやったことがないのにですよ。そうやって、人に頼むのではなく自分で動く人でした」。

昭和45年元旦、新年の家族写真(左が島原義海)

造成が始まった頃の細島工業団地

1945-1972

発展期

24時間365日、夜でも、休日でも、仕事引き受けます！という姿勢は、ロコミで評判を呼び、得意先を拡大していった。「信用第一」の社是が名実ともに認められ、日向中島鉄工所の名は業界に広く知られるようになった。

history 1970-1980

鉄工業はサービス業

ときには社長自ら現場に出向く「お客様第一主義」で信用を獲得。業界内で存在感を増していった。

製缶工場建設、フル回転の日々

プレハブからスタートした日向中島鉄工所だったが、第一糖業をはじめ旭合繊や宮崎合繊などの繊維業、三菱セメントのセメントサイロ製造、日向精錬所の配管工事など、取引先は順調に増えていった。それに伴い従業員数も3年目には30人に。昭和48年には日向市亀崎に660mの製缶工場が完成。これによって各種貯槽やタンク、ボイラー、コンベアー、輸送機の製作・据付業務が可能になった。併せて事務所、休憩室、機械室も完成。第一糖業の敷地内の仮住まいから卒業し、ようやく本当の独り立ちと言えた。

この頃、南日本ハムや日本ブロイラーとの取引も始まり、のちに食品業界に強くなる素地ができていった。会社では、製品の納品に加えてその後のメンテナンスも重視していたため、先方に出向いての現場作業も多かった。社長である義海自身もまた営業兼技術屋として現場に顔を出す日々だった。取引先とは自然と、深く、長いつきあいとなっていった。

初期の頃の製缶作業。得意先でのメンテナンス作業も多かった

24時間365日体制

「鉄工業はサービス業」という義海の信念に基づき、創業当初から「24時間365日、呼ばれればいつでもお伺いします」という姿勢でお客様に向き合ってきた。修理や点検の依頼は昼夜関係なく飛び込んでくる。ましてメンテナンスは取引先の機械が止まる休日・夜間の作業が多く、依頼があれば休んでいる社員に連絡を取って派遣することもあった。「今日は休みだから行けません」は、お客様第一の会社にはありえなかった。

当然、従業員には負担がかかる。休日や夜の呼び出しに備え、家庭サービスもままならない。何より社長である義海自身も、仕事を離れる日は一日たりともなかった。「でも、たいへんだったという記憶はあまりないんだよね。みんな一丸となっていたからかなあ。ただ、ひたすらがむしゃらだった」と、黒木富男さんをはじめ古参の社員の多くは語る。

この営業姿勢において、「あそこに頼めばいつでも来てくれる」「まっさきに客のことを考えてくれる」と、取引先の信頼は高まっていった。他社が引き受けない仕事を引き受けることで、「日向中島」の名は徐々に知られることとなる。まさに社是にかかげる“信用第一”。この精神は、現在も社の核として社員一人ひとりにしみついている。そして、これこそが会社を大きく育てる要因になったと、今、あらためて噛みしめるのである。

history 1980-1990

“信用第一”

お客様がお客様を呼び、会社は軌道に乗った。仕事以外の場面でも人の輪を大切に、縁が広がる。

縁が会社を育てた。ロコミが一強い！

“信用第一”をモットーに、可能な限りお客様の要望に応える姿勢は、新しいお客様を連れてくることにもなった。お客様自身が日向中島の営業マンとなって、次のお客様を紹介してくださるのだ。これは、自社のセールスマンが100のセールストークを並べるより強い。創業まもなくからのおつきあいである南日本ハムの当時の工場長、仙頭義爾さんは語る。「ロコミが一番強いんですよ。安定する。しかし、その代わりそれに応えるだけの技術とサービスアフターがないと紹介しませんよね。紹介した人の信用に関わるわけだから。社員さんの質も大きいですよ。休日・夜間であっても、顧客の要望に応えられる人材が必要になります」。

同じく古くからのお得意様、日本ホワイトファーム(旧・日本ブロイラー)の当時の工場長・鈴木敏功さんはこう言う。「メンテナンスというのは休日・夜間の作業。これはもうメンテマンの宿命ですよ。それを割り切って従業員をうまくコントロールできるかは、社長の手腕にかかっています。日向中島の社員さんたちには機動力がある。新規工事にしてもメンテナンスにしても、工場を止められる期間内に必要な人員を集中させ、機械をすべて入れ替えるとかね」。

このような評価を得られたのは、義海の来配もさることながら従業員全員の協力体制による機動力を発揮してきたからにほかならない。

すべては人の“輪”

ロコミで仕事の幅が広がったのも、従業員全員の協力体制が可能だったのも、人の“輪”の力によるところが大きい。義海は仕事以外の場面でも、人の輪を大切にした。たとえば創業2年目に創設された野球部。社員同士の輪を築きたかったから創ったものだ。そこに得意先の面々も加わり、ともに汗した。早朝5時から試合をこなし、そのまま出社ということもザラだったが、皆、スポーツに仕事に常に全力投球。日向地区大会で優勝し、県大会まで勝ち進んだこともある。宮崎日日新聞に写真入りで紹介されたことは、よき思い出である。義海は社外のゴルフのつきあいも大切にしていたが、いわゆる接待ゴルフとは異なる、仕事を超えた交流の場だった。

限られた狭いスペースでの作業も

県大会に勝ち進んだこともある伝統の野球部

1970-1990

第二創業期

業務の拡大に伴い、創業の地・亀崎を離れ現在の日知屋に移転して新工場を設立。食の安全を担う会社として新しいステージへとステップアップした。そして世代は代わり、創業者の思いを胸に新たな船出となった。

history 1991-1998

新工場へ移転、さらに機動力アップ！

順調な事業の成長と社員増に伴い、創業の地を離れ新天地へ。地元の雇用にも貢献した。

新しい土地で、社員は100人に

平成3年、亀崎から現在地に移転し、新工場を設立した。大きな納品物も増え、天井の低い旧工場ではすでに手狭になっていた。しかし当時この場所は、県外からの誘致企業でないと入れない工業地帯であった。そこで、米国のゴーデックス株式会社と名古屋の名豊建設株式会社との合弁で、ユー・エス・シーという新会社の形をとって、誘致企業として現在地に工場を建設できたのである。

また、雇用創出として地元日向からの採用も条件だったので、この時期社員数は一気に100人まで膨らんだ。しかしバブル的に増えた従業員数はその後落ち着き、現在では60人前後である。平成12年にはゴーデックス社の、15年には名豊建設の、それぞれの所有株式を全額買収し、現在に至っている。

広い新工場ができ、作業効率は高まった。県外出張もさらに増えた。長いときは数か月間、現場での据付工事にかかることもある。

完成した日向中島新工場の落成式

“みんながなんでもできる”がモットー

会社では“みんながなんでもできる”をモットーにしている。他社では分業化し、それぞれの分野の専門性を高めるところが多いかもしれないが、日向中島では、たとえば溶接部というのを設けていない。誰もが溶接ができ、みんなのスキルが上がっていく。それでこそ機動力が発揮できる。創業者自身が営業マンであり技術屋であったように、製造の人間も現場に行けば営業である。そしてトップダウン方式ではなく、個人個人が現場で決断できるスピードを身につけてきた。

昭和47年の南日本ハムとの取引を皮切りに、日本ブロイラー(現ホワイトファーム)など、期せずして会社は食品加工業機械・設備の製造に強くなっていった。ハムやソーセージ、鶏肉加工などのための機器の納入とメンテナンスだ。昭和56年の発酵醸造機械関連の取引開始以降は、酒や焼酎、醤油など醸造関係の仕事も増えていった。

食の安全が叫ばれるようになって久しいが、平成2年の食鳥検査制度改正(食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律)、また平成13年の屠場法改正によって、食肉業界はそれまでの作業工程を全面的に見直さなければならなくなった。食の安全を保つため、検査が厳しくなったのだ。するとそれまでのライン、機械を総入れ替えしなくてはいけない。日向中島にとっては、大きな仕事のチャンスだった。食肉加工の前工程・後工程の機器を製造し、据え付け工事まで行った。

history 1999-2008

社長交代、新しい時代

食品業界での信頼を得るなか、現社長・島原俊英が入社。時代の変わり目にビジネスチャンスを模索する。

「まずは好きにやってみろ」

平成11年、創業30周年の年に、現社長である島原俊英が入社する。父・義海に請われ、それまで勤めていた会社を辞めての帰郷であった。実はその少し前より、日向中島では製鉄機械や製紙機械など新しい業界への仕事にチャレンジしていたが、その取引先が倒産するなど苦境に立たされていた。だまっていても仕事が舞い込む時代は終わっていた。しかし、先に述べた屠場法の改正など、時代の変わり目にビジネスチャンスがあるのも事実だった。

平成13年、島原義海に代わり島原俊英が2代目の社長に就任、義海は会長となる。多くの社員が認めるように、義海は口で言うより行動で示すタイプだった。社長交代にあたっても、ああしろこうしろという指示はほとんどなく、好きにやってみろという態度だった。

俊英の挑戦、義海の旅立ち

俊英は、それまで外注に頼っていた設計力を高めることに力を入れた。また、それまでは素材だけ作ってすべて現地で組むという方法をとっていたが、いったん自社で借り組みして不具合をすべて調整してから現地に持っていく、という方策を始めた。この手法により、現地での工事は格段にスピードアップした。この2点の強化によって新しい仕事も増えていった。設計から据付まで一貫して頼める会社として認知されるようになったのだ。

平成19年、工場内会議室ができた。あわせて、食堂や休憩室を兼ねた厚生棟もできた。昼休みや休憩時間に、従業員がくつろぐ憩いの場だ。しかしこの翌年、義海は体調を崩す。アスベスト被害で知られる肺の病気、中皮腫だった。7月に入院し、多くの方々に励まされながら治療を続けたが、10月20日、76年の生涯を閉じた。創業から40年目のことだった。

食鳥用機械の据え付け